

# 地域協働による景観確保のための除雪 ボランティアの取り組みについて

網走開発建設部 道路第1課 ○豊島 真生  
河崎 拓実

本稿では、道路計画・整備・運用の決定プロセス手法としての「協働型インフラ・マネジメント」の概要を述べるとともに、平成17年度から世界自然遺産に指定された「知床」へのアプローチとなる、ウトロ地区で実践した除雪ボランティアの取り組みにおいて実践内容の評価と、今後の課題及び「基本プランの作成⇒プランに基づく施策実施⇒施策の効果の評価⇒地域活性化の方向性検討」といったPDCAサイクルへの発展の可能性について報告する。

キーワード：地域交流・連携、住民参加、地域協働プロジェクト、計画手法

## 1. はじめに

網走開発建設部では、地域住民、道路ユーザーとの協働により「協働型インフラ・マネジメント」の実践に取り組んでいる。

本手法は、「使える道路」をキーワードとして、道路とその沿道を一体空間としての魅力向上を目指し、地域の魅力・弱点を十分に理解し、地域の実情に即し、「こうすれば使える」といった知恵を出し合っ、行政・地域・ユーザーとが協働して作り上げるというものである。

本稿では、この取り組みを通じて実施した、世界遺産知床のための除雪ボランティアの取り組みについて、実施に至った経緯、実験の結果を紹介するとともに、今後の道路の維持管理、使い方の工夫の可能性について提案する。

## 2. 協働型インフラ・マネジメントの概要

協働型インフラ・マネジメント手法の検討プロセスを図1に、検討体制を図2に示す。

まず、検討のスタートとなる1stステージにおいて、道路管理者が、当該路線の利用者であり地域を熟知している有識者等とともにWSを実施しアドバイスを得ながら、路線に関わる地域戦略、路線に求められる役割、性能及び整備・運用の工夫を検討する一連のプロセスを策定した。

その後2ndステージに移行し、当該路線周辺の関係行政機関及び農業、商業、観光業等の各業界のリーダー等

で構成される「路線連絡会議」を設立し、基本プラン（案）をもとにした当該区間の整備・運用の基本方針の策定に向けた意見交換を進めている。また、基本方針の検討テーマ毎に特に関係するメンバーで構成される「推進グループ」において、基本方針に基づく具体的取り組みの検討を行い、実施、評価を継続的に行う体制を構築することとしている。1stステージで実施したWSのメンバーについては「企画アドバイザー」として取り組み全体の進捗に対し継続的に助言をいただくこととした。

これらの検討では、実際の整備・運用やその試行結果を評価し、評価結果を踏まえ見直しを行う継続的なPDCAサイクルを実施することとしている。

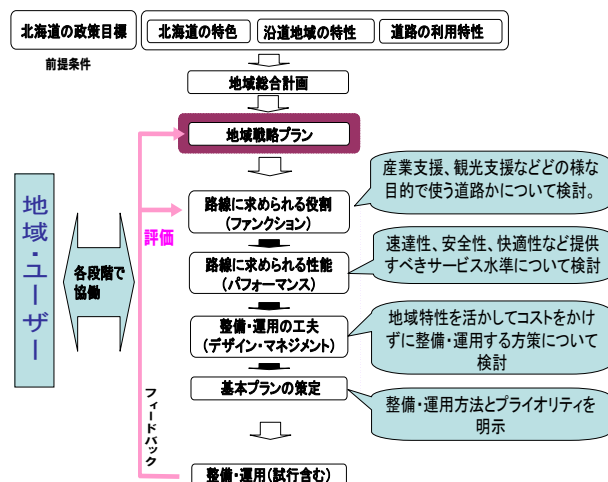


図1 検討プロセス

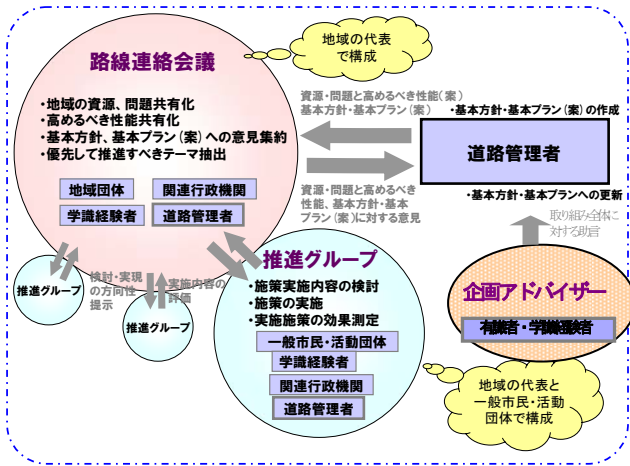


図2 検討体制

### 3. 除雪ボランティアを行うに至った経緯

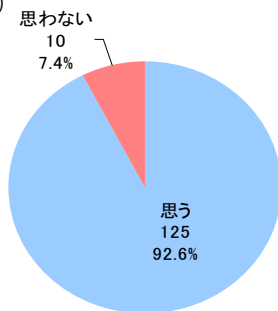
「協働型インフラマネジメント」の検討の場で「冬期の知床のアクセス道路では、流氷や海が見えないのは魅力減では?」という意見が出された。これをきっかけに、行政・地域・ユーザーとが協働で、行えることを模索し、解決に向けた取り組みを実践してみようということになった。

取り組みを実践している知床は、2005年7月世界自然遺産に登録され、国内外から注目される有数の観光資源であり、一年を通じて多くの観光客が訪れ、冬期には、この地域特有の景観である「流氷」が見られ、オーロラファンタジー、流氷体験ツアーなどのイベントが催行され、夏とは異なる知床の魅力を堪能することができる。

冬の知床の魅力は、観光客のみならず地元住民も「景色」であると感じており、冬に来訪する観光客の大半が「流氷」などの景観資源を見たいと思っている。(図3)(図4)

その知床の重要なアクセス道路である一般国道334号の斜里町峰浜地区からウトロ地区に通ずる海岸沿いは、「海に沈む夕日」、「流氷」など優れた景観資源を有しており、走りながら冬の知床の魅力を体感できる絶好のロケーションである。しかし、車道や歩道部の通行機能を確保する除雪によって防護柵周辺に堆雪する雪堤が原因で、走行している乗用車から「流氷」が見えなくなってしまうという課題を抱える区間でもあった。(図5)

図3. 知床の海や流氷をみたいと思う観光客のニーズ



道路管理者としては、防護柵の堆雪を取り除く附帯除雪は、継続的に除雪のたびに実施するのはコスト・体制的に困難だが、ひと冬1回程度の実施なら可能であること、地域からは、具体的な実施すべき箇所、期間の提案があり、住民だけでは作業に限界があるものの、実際に可能かやってみようという前向きな意見が出た。

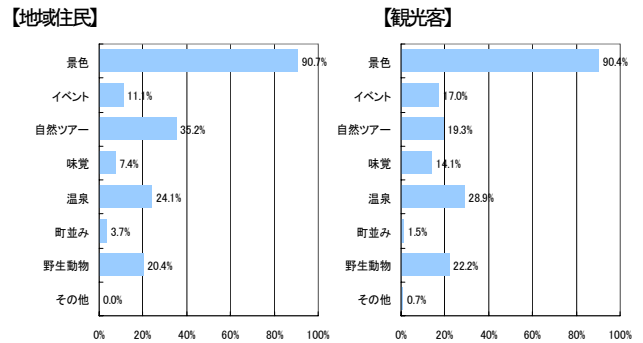


図4. 冬の知床の魅力



#### <道路管理者の意見>

- ✓ 降雪時の通行機能を確保するための車道及び歩道部の効率的な除雪が原則。
- ✓ 歩道の防護柵部の除雪は、車道の除雪とは異なり、除雪車などの大型機械の導入が困難。その為、人力による除雪が必要であり、コスト面で問題がある。
- ✓ 冬期間を通じた実施は難しいが、オーロラファンタジー開催時期に合わせる等して1回程度実施するのは可能。

#### <地域・ユーザーの意見>

- ✓ 他の地域でも事例のある冬期除雪ボランティアサポートに近い取り組みならできそう。
- ✓ 道路沿いのパーキングのある箇所であれば、走っても、停まっても見られてよいのでは。
- ✓ オーロラファンタジーの期間中だけでも効果はありそう。
- ✓ 堆雪した雪は、硬く住民の力だけでは却界。

これらの意見を踏まえ、すぐに実現可能な取り組みとして、道路管理者が付帯除雪により雪堤を一度除去し、その後、地域住民団体が堆雪状況を監視し雪かきを実施する除雪ボランティアの案をまとめ、実験を行い可能性や知見を得ることで合意に至った。



図6. 除雪ボランティアの実施イメージ

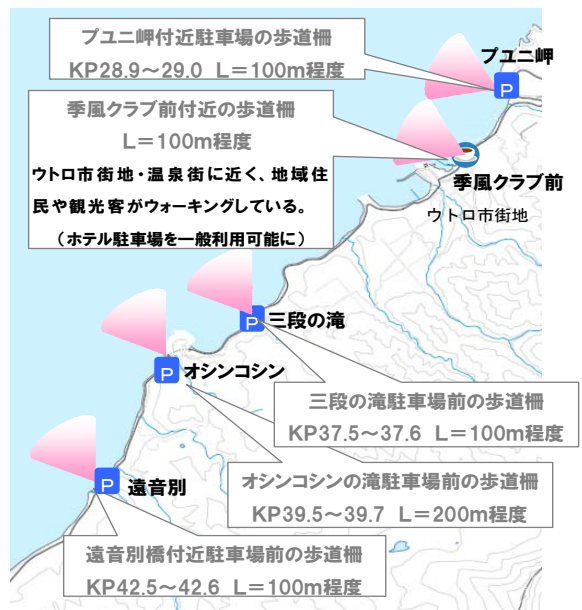


図7. 除雪ボランティア実施箇所

#### 4. 除雪ボランティア実験

##### 4. 1. 実験概要

ウトロ地区で2月~3月にかけて開催されるイベントであるオーロラファンタジーの期間に合わせ、道路管理者が一度、防護柵付近に硬く固まって堆雪した雪堤を付帯除雪により除去し、その後、地域住民団体が堆雪状況を監視し、雪かきが必要と判断した前日に、チラシで参加者を募り、実験を実施することとした。実施場所・区間としては、地域住民団体が実施可能な箇所・延長で、観光客に安全に停車して景観を楽しんでいただくことを想定し、既存の駐車帯がある箇所及び民間の駐車場が利用可能な箇所(5箇所)とした。(図7)

##### ボランティア除雪の実施状況

###### <第1回目 (H20.02.28)>

- ✓ 風が強く、地吹雪に近い天候
- ✓ 総勢28名参加(チラシで参加8名、地元団体や観光協会、自治会など)
- ✓ 2パーティに分けて、担当地点を分担して実施。
- ✓ 作業時間2時間30分程度

###### <第2回目 (H20.03.11)>

- ✓ 風もさほど強くなく、良い天候。
- ✓ 総勢30名参加
- ✓ 全員で一緒に行動し、1箇所ずつ除雪を実施。
- ✓ 作業時間1時間30分程度

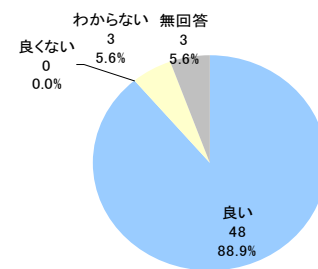
##### 4. 2. 実験の評価

付帯除雪実施前後、雪かきボランティア実施後の雪堤高さを把握するとともに、参加者並びに観光客へのアンケート調査により実験の効果を把握した。

##### (1) 取り組みの評価

ボランティア参加者については、取り組みの評価は高く、実験当日に来訪していた観光客の評価も高かった。

##### 【参加者】



##### 【観光客】

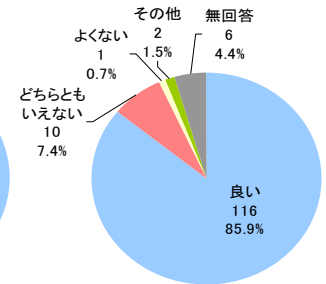


図8. 除雪ボランティア」の評価

##### (2) 流氷景観の確保

雪堤高さが50cm程度以上になると、乗用車の車窓からの流氷景観が阻害される。道路管理者が付帯除雪を実施しない場合はもちろん、付帯除雪実施後も、継続的に除雪を実施しなければ雪堤高さが50cm以上となり、流氷景観が確保できない。しかし、除雪ボランティアを行うことで、流氷景観を確保することができ、実験当日に来訪していた観光客の大半が走行中に流氷をみる事ができる状況であった。

##### (図9)

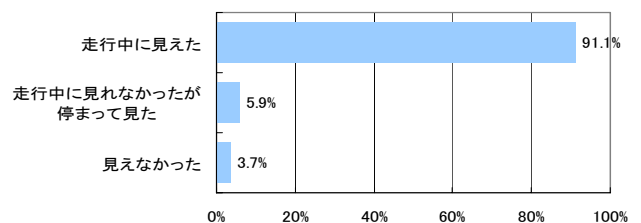


図9. 実験時の流氷景観の確保状況

### (3) 除雪作業のしやすさ

1回目では「大変だった」という方が約半数であったが、その理由は悪天候に対するものが多かった。また、5箇所のうち1箇所については、附帯除雪を実施しないままボランティアによる除雪を実施したため、それに起因する意見であると考えられる。一方、2回目は天候も良く、堆雪していた雪の量も少なかったことに加え、1回目に1台だった家庭用除雪機が、2回目には3台も持ち込まれるなど、作業の効率性も高まったことで、作業が「大変だった」という意見は1割程度に減少した。

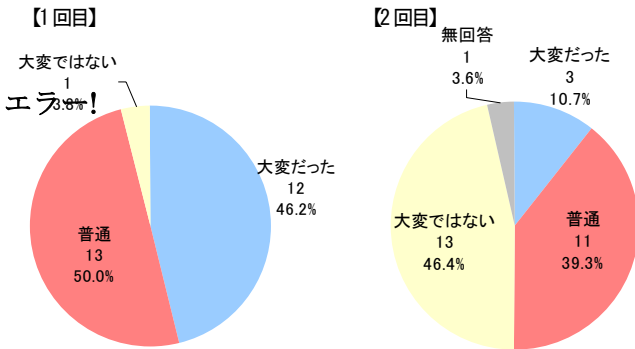


図10. 除雪作業に対する感想

### (4) ボランティア参加者の確保

新聞チラシによる募集で、主催団体関係者以外では1回目8人、2回目7人が参加し、1回につき約30人程度の人員が確保できた。今後も参加したい、都合が合えば参加したいと答えた方が約9割を占め、参加者を増やす方法としては「今のままでよい」と約半数が回答しているが、なかには「温泉やイベント」とのセットを望む声もあった。

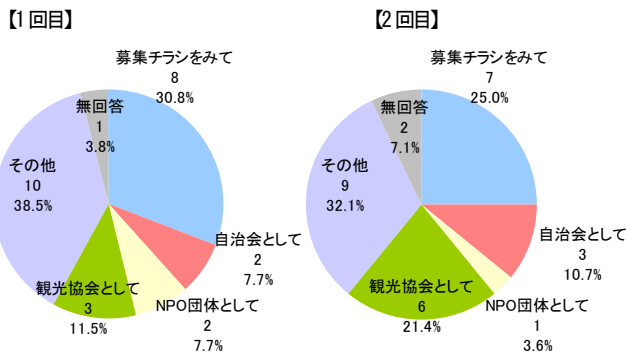


図11. 参加のきっかけ

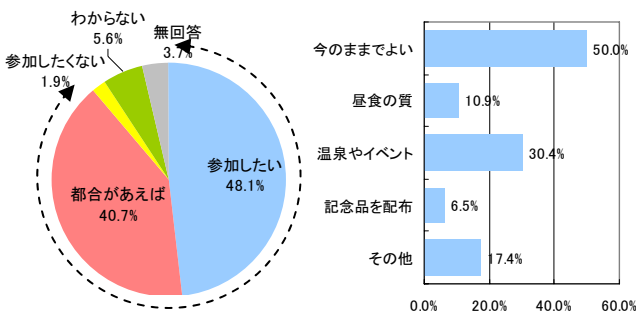


図12. 今後の参加の意向

図13. 参加者を増やす方法

Masao Toyoshima, Takumi Kawasaki

### (5) 除雪体験ツアーの可能性

今後、ボランティア除雪の体験ツアー化についての意識を問うたところ、地域からは、「何もなくても参加したい」「地域交流のために参加したい」という声が多く寄せられた。図14その一方で、来訪していた観光客からは「お金を払ってまで参加したくない」という声の他、「食事や温泉がつくなら参加したい」という声もあった。(図15)

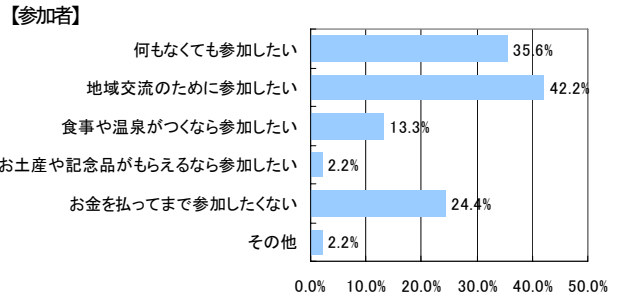


図14. 除雪体験ツアー化に対する意向

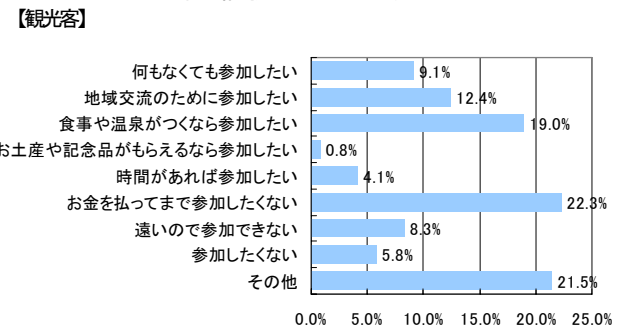


図15. 除雪体験ツアー化に対する意向

### 5. 除雪ボランティアの可能性

事前に附帯除雪が実施され、人力でも除雪が可能である状態であればボランティアでの除雪は十分可能であり、特に降雪が増えはじめる2月中から雪堤状況の監視とボランティア除雪の実施を継続的に行えば雪堤も低く、時間・労力軽減が可能と考えられる。

また、地域においては、より早い時期から取り組みの周知、参加者募集を行うことで、参加者が継続的に確保される可能性は十分にあると考えられる。今後、継続実施の体制検討を進めることで、ボランティアサポートプログラムとしての実施体制確立が期待できる。

### 6. あとがき

本稿では、「協働型インフラ・マネジメント」の取り組みを通じて実践した除雪ボランティアの取り組みを報告した。今後、「路線連絡会議」及び「推進グループ」においてさらに検討を進め、より多くの主体の参加促進や、継続実施可能な体制・実施方策を確立し、地域特有の冬の景観資源「流氷」を活かした、地域観光の課題解決・魅力向上に資する取り組みとして発展・継続させたいと考えている。